



巻 頭 言

一発処理剤の健闘を讃えつつ・・・

財団法人日本植物調節剤研究協会 理事 竹下 孝史
研 究 所 長

除草剤が使用され始めて約50年、「一発処理剤」の普及が開始されて19年が経過しようとしているなか、除草剤が継続的に使用されてきた水田では今、新たな雑草種が見え隠れしつつある。量的にも種類についても発生する雑草はかなり変化してきているのではないかとの議論が常に関係者の間で交わされているが、状況分析は人それぞれで、これぞといった確証に至らないまま時だけが過ぎていこうとしているように思われる。そこで今後の除草剤開発にとって必要とされる情報だけに、各地域の都府県の調査による雑草発生面積の数値を基に算出した主要雑草の発生面積比率と、植調研究所で数年間実施してきた雑草発生状況の調査結果を合わせて、その発生面積の推測を試みた。詳しくは別の機会に本誌で紹介したいと思っている。

まず主要雑草の筆頭にあげられるノビエは、全国の80%でまだ発生が見られるようであるが、現行の除草剤での効果が十分に発揮されており、一圃場内の発生個体数はかなり減少しているものの、平成12年度の水稲栽培面積176万haに対し、それでもまだ約50万haの圃場面積で問題視されていると計算される。ホタルイについては約80万haに発生が見られていると推定されるなか、まだ残存個体の多い圃場は15万ha、多くても30万haと見積もられる。

一発処理剤開発当時の重要な対象雑草であった多年生雑草のウリカワ、ミズガヤツリは両草種ともに30万ha程度にまで発生面積は減少しており、水田に残存している個体があっても殆ど問題とならない状態までに発生本数は少なくなっているとみれる。キラキラと太陽の光を反射し、水田のなかで己の存在を主張していたミズガヤツリは、当時は遠く車窓からでも散見されたが、今ではそんな姿を見ることは殆ど無くなってしまった。これぞ一発処理剤の眼に見える成果と言えよう。

これに対しクログワイ、オモダカの発生面積

は、急激ではないものの年々静かに拡大していることが全国的な調査によっても示されている。両草種共に地域的にもまた圃場間によっても発生に偏りがあることから、発生面積の推定は難しいところがあるが、それぞれ40万、45万haに発生が見られ、クログワイは少なくとも30万haで問題視されるようになったと推定。オモダカは嘗てのように大きな葉が風に揺れる様を見る機会は少なくなったと感じるものの、18万haで防除が問題となっていると推測される。

クログワイ、オモダカともに一発処理剤だけでは防除が困難なところから「難防除雑草」と位置付けられている訳ではあるが、もとより除草剤でこの自然界の事象を全てコントロール出来る筈はなく、これまでもその時代、時代に応じた除草技術が開発されてきた経緯があり、即ちいつの時代になっても除草剤と雑草とは「追いかっこ」でしかないと常々考えている。

以上の結果は広く普及されている一発処理剤が使用されている上での、且つやや乱暴な試算であり、ここで一発処理剤を完全に不要とする意図は毛頭ないが、まだ一年生雑草は無視出来ないとはいえ、雑草の発生密度は全般に少なくなり、嘗て一発処理剤がターゲットとした中のウリカワ、ミズガヤツリが大きな問題とはならなくなってしまった水田が多く見られる今、一発処理剤の使用そして開発ばかりにとらわれることなく、新たに問題となりつつある雑草も含めた「新たな防除方法」としての除草剤の使用やそのための開発に着手することが、そろそろ必要となっていると考える。

この局面に至ったのも一発処理剤の成果によるものであり、これからの雑草防除技術の新たな展開を目指し、「ごくろうさま一発処理剤、そしてありがとう」と、当初からの開発に携わった関係者のひとりとして、いま心から、とりあえずこれまでの健闘を讃えてあげたい気持ちである。